

『フェンスレス』オンライン版(第五号) ● 特別付録 資料1

総目次 『戦闘文芸』(戦闘文芸社)

『尖 鋭』(日本無産派文芸聯盟)

『時代文化』(時代文化社)

『戦闘文芸』

戦闘文芸社発行

大正十三年六月〜大正十四年四月(全九冊)

第一卷第一号 大正十三年六月一日発行

創刊号

〔表紙〕 *1	アンリ・バルビュス	〔表1〕
戦闘文芸創刊号目次		〔表2〕
若き人々に訴ふ (*巻頭言)		1
プロレタリアートの文学と独逸表現主義の		
戯曲	北見與志	2
寸言三ツ	宮浩子	9
超特大傑作大喜劇「新潮合評」劇		10
工場裏人種 (*創作)	山本伊津雄	11
俺達の歌 — conte romantique — (*創作)	英歌	21
アスパラ瓦斯		36
詩		
労働者	西村三郎・宮浩子訳	37
フアンタサス NO.12.	リヒャルド・デエメル	37
死せるリープクネヒト	アルノー・ホルツ	37
真黒な小男	ルドルフ・レオンハルト	38
散弾 当るも……当らぬも……	アレキサンド・プロツク	39
農民文学に対する一考察	介木晃	39
		43

芸術考

宮浩子

44

社告 *2

47

遊撃隊

映画と民衆芸術

山本伊津雄

48

嬰兒漫言

英歌

48

街頭雑感

介木晃

50

編輯後記

英

〔表3〕

〔裏表紙〕 *3

ルナチャルスキー

〔表4〕

同人 *4

〔表4〕

〔奥付〕

〔表4〕

*1 一卷四号まで、表紙に海外著名作家等の文章が引用されている。創刊号には、「唯一の神が存在する。／無限なる内的生命を導く為に、／又個人が／万人の生命の中に持つ分担を導く為に、／決してそれから身を転じてはならない／一つの神がある。／真理！」とある。

*2 「八月号は予定の如く休刊する。九月号よりは、続けて、休みなく出す。(九月号へ切は七月二十五日)」。

*3 「自分自身を解放する為に戦ひつゝあるプロレタリアの文化は明白に限定された闘争に基く階級文化である。それはロマンチックである。それ自身激烈なるものである故に、其の形式はなやましい。／彼等の最も高き発達に達してしまつた階級、及び国は民、其の文化に於て古典的である。／自己表現の為に戦ひつゝある階級はロマンチックだ、そして其のロマンチックは「あらしと、力」典型的特質を持つてゐる。衰微すべき運命にある、階級は他のメランコリー

な、幼滅的な、デカダンスのロマンテイシズムを取る。」
 *4 宮浩子・芥木晃・山本伊津雄・北見與志・坂田紺一郎・中野静・土橋佳文・佐川清親・西村三郎・英歌。

第一卷第二号 大正十三年九月一日発行

九月号

〔表紙〕 *1	エルンスト・トルラア	〔表1〕
戦闘文芸九月号目次		〔表2〕
闘争圏外に夢想する詩人に与ふ	英	1
芸術の「永遠」偽装より脱して	英歌	2
散弾 当るも……当らぬも……		5
叔母 (*創作)	和田文彌	11
働き者 (一幕)	阪田紺一郎	12
汝の旗を守れ (*詩)	英歌	21
絶望の溜息 まづしき老人のうたへる (*詩) 英歌	英歌	34
冬 (*詩) Paul Mayer	西村三郎	35
閑話	閑散子	37
偶感	西村三郎	38
村のインテリゲンチヤ 外二篇	北見與志	39
ある地主/村のインテリゲンチヤ/村の女		40
裏切・売名・食倒し	英歌	43
街頭にて	山本伊津雄	43
遊撃隊		45
嬰兒漫言	英歌	47
		48
		49

排日と産児制限 阪田紺一郎 49

戦闘文芸創刊号を読み 秦蓉 50

黙殺 北見與志 50

編輯後記 *2 北見 〔表3〕

創刊号目次 〔表4〕

同人 *3 〔表4〕

〔奥付〕 〔表4〕

*1 「道を！/道を！/汝詩人よ、その道を示せ」『転変』中の

「覚醒の促し」——編輯後記より

*2 「寄贈雑誌、無産詩人、巷、ワシラノシンブン」

*3 芥木晃・佐川清親・和田文彌・北見與志・山本伊津雄・坂

田紺一郎・西村三郎・中野静・宮浩子・英歌(土橋佳文の

名が消える)。

第一卷第三号 大正十三年十月一日発行

十月・綱領発表号 *発表

〔表紙〕 *1	アウグスト・ペーベル	〔表1〕
戦闘文芸十月号目次		〔表2〕
既成プロレタリア作家への言葉		1
戦闘文芸聯盟綱領規定草案		2
プロレタリア劇作家エルンスト・トルラア		5
近代文明に対する情熱と辛苦の叫びの戯曲 *2		6
ビ、エイチ・クラック、阪田・西村		15

市民の敵（四幕）
夜明け迄（*創作）
弁明一つ *3
散弾 当るも……当らぬも……
津田光造氏に答ふ
クラルテ
戦闘文芸綱領発表について
三等飛行船々客
遊撃隊
嬰兒漫言
黙殺
バツトのカラに書い「た」文
不破又男君の盲勇「トルラー論」
編輯後記
九月号目次
同人 *4
〔奥付〕

北見與志 16
山本伊津雄 29
46
47
48
50
52
53
閑散子 58
英歌 54
北見與志 54
村上清 56
西村三郎 56
〔表3〕
〔表4〕
〔表4〕
〔表4〕

*1 「人間の進歩の為に於ては、／＼どんな力でも、／＼たとへ最も微弱なものであらうとも／使はずにおくべきではない。」
（「婦人と社会主義」）

*2 Theatre Magazine

*3 「弁明一つ——本誌の表紙が、文芸戦線のモホーだと云ふ方がある様だが、それは未だ「善く知る」とは云へない。白状しますが、表紙は「赤旗」のヘウセツだったのです。諸君の方の赤と黒も「赤旗」の流れをくんだのではないの

ですか？ 文線ぶんせんの同人もうぬぼれては駄目だ。しかも僕「等」は誌名に於て諸君に敬意を表し「文芸戦線」の名を等ゆづゝたのだから——」
*4 介木晃・佐川清親・和田文彌・北見與志・山本伊津雄・坂田紺一郎・西村三郎・藤波誓一・宮浩子・英歌（中野静の名がきえる）。

第一卷第四号

十一月号

大正十三年十一月一日発行

〔表紙〕 *1 バーナード・シヨオ 〔表1〕
〔目次〕 *1 英 〔表2〕

彼の斃れたる所より出発せよ（故有島崇拝党に与ふ） *2 英 3
ルナチャルスキーの芸術——態度及び作品、其他に就て—— *3 北見與志 4
一九一四年——一九二四年 エルンスト・トルラー、本郷一郎 9

散弾 当るも……当らぬも…… *4 10、16
青年に寄语す 友よ批判せよ。而して…… 11

○ 吉江喬松 11
○ 水守亀之助 11
○ 小島徳彌 11
○ 小川未明 11
○ 松本弘二 11

○	生田長江	12
○	赤松月船	12
○	尾崎士郎	12
○	堺利彦	12
○	伊東憲	12
○	中村吉蔵	12
○	藤森成吉	12
○	伊福部隆輝	12
○	松本淳三	13
○	山田清三郎	13
○	長谷川巳之吉	13
○	文芸運動より政治運動へ	13
○	佐野袈裟美	13
○	藤井真澄	14
○	金子洋文	14
○	橋爪健	14
○	正富汪洋	14
○	西宮藤朝	14
○	百田宗治	14
○	中西伊之助	15
○	武藤直治	15
○	千葉亀雄	15
○	佐々木孝丸	15
○	今野賢三	15
○	村松正俊	15
○	前田河広一郎	16
○	加藤一夫	16

○ (無題) *5 平林初之輔 16

『浮世の馬鹿』の言葉 — 『文芸時代』の創刊号を評す — 山川均 16

「行人」より「宣言一つ」まで 山本伊津雄 17

感激の涙 — 嬰兒漫言四 — 阪田紺一郎 19

予言 (*詩) — ワルテル・ハーゼンクレーフェル、藤波誓一訳 英歌 21

戯曲時代を生きる者 英歌 23

アナトール・フランス逝く 和田 58

編輯後記 *6 [表3]

十二月号目次・新年号原稿募集 [表4]

同人 *7 [表4]

〔奥付〕 [表4]

*1 「そこでだ、文学なんて／ほかの人に頼むとせう、／俺あ／チャーナリズムで沢山！」

*2 この号よりノンブルは3から開始(1、2頁なし)。

*3 この一文は『ルナチャルスキーの三つの戯曲』の巻頭に掲げられた、英語への翻訳者、エル・エ・マグナスとケイ・ウオルターの「紹介」の省訳である

*4 「ジャン・ヂョレス国葬！／感慨無量なるものがある」(10頁、埋め草)

*5 山川菊栄病氣治療中のため代わりに返事すること。

*6 「寄贈雑誌 進め、政治研究、ワシラノシンブン、ウーマンカソント」

*7 介木晃・佐川清親・和田文彌・北見與志・山本伊津雄・阪

二月号予告

編輯後記

〔奥付〕

〔広告〕 紅玉堂書店「表現派戯曲集 生血の壺」

〔広告〕 希望閣「ロシアに入る」他

第二卷第二号

二月号

大正十四年二月一日発行

〔表紙〕

戦闘文芸二月号目次

先輩に与ふ

無産派文芸運動の危機とその新方向

金子洋文様一本参る

編集部より（*原稿募集）

〔文芸戦線〕よ何の結束ぞ

〔埋め草〕

フエビアン協会所属の文芸家何をなし得るか

文壇が行く

築地小劇場に与ふ

研究部通達

社会思想文芸の範囲と形態

フエビアン協会共産主義者の大失敗

つゞく強者なき故か？

無産者出身と云ふ事

鶯と鶉

蚤と犬 *1

百姓の歌 *2

食ひものにされるのさ（人生童話）

編輯後記

〔奥付〕

〔広告〕 紅玉堂書店「表現派戯曲集 生血の壺」

〔広告〕 希望閣「ロシアに入る」他

〔奥付〕

*1 伊太利の「プロレット」カルト誌から。

*2 戯曲クローデイの一節。

第二卷第三号

三月号

大正十四年三月一日発行

〔表紙〕

戦闘文芸三月号目次

意識して忘れんとする言葉

治安維持法案と社会運動上に於ける戦線の統

一の必要

「ねむれる者」

妄想的知識階級に与ふ

『善処』の真因を訓ゆ — 伊藤永之介氏に与

ふ—

『闇に悶ゆる』を読む

ホフマン、本郷一郎訳 22 ~ 23

マリヤ・マルカチ・ニコリ 23

A 訳 23

英 24 ~ 31

英 24 ~ 31

32 32

〔表 3〕

〔表 4〕

〔表 1〕

〔表 2〕

3

4 ~ 8

9 ~ 11

11

12 ~ 13

13

14 ~ 15

15

16 ~ 17

17

18 ~ 19

19

20

21

〔表 1〕

〔表 2〕

3

4 ~ 7

7

8 ~ 9、

18

10 ~ 11

11 ~ 12

12

11

11

11

世相 西村三郎 13
 労農の詩 ワレリー・ブリーユソフ(二篇)、
 ピョートル・オレーシシ(二篇) 本郷一郎 14
 ダバースト馱弁 山本伊津雄 17
 いたち(つこ) 英歌 18
 思想戦・文芸戦 阪田紺一郎 20
 老いた若い娘(一幕) 20
 編輯後記 31

〔奥付〕 32
 (広告) 紅玉堂書店「表現派戯曲集 生血の壺」 [表3]
 (広告) 希望閣「ロシアに入る」他 [表4]

第二卷第四号 大正十四年四月一日発行
 四月号

〔表紙〕
 戦闘文芸誌四月号目次
 治・法両院を通過す! (*詩) はじめ [表2]
 日本無産階級文芸作家聯盟短見 岩崎一 4
 階級線に於ける個人の自覚と責任 岩崎一 6
 今野氏の釈明に関して先輩に云ふ 山本伊津雄 8
 無産階級の立場から新井紀一によせて前期う 9
 ロ作家に与ふ 白川鴻長 10
 太郎兵衛さん 西村三郎 11
 青年よ闇黒の中にかの「一つの見える手」

を意識せよ (*詩) 北見興志 12
 旗をふせよー同人諸兄にー (*詩) 岩崎一 13
 先輩よ、少年よ、同志よ (*詩) 山本伊津雄 14
 曾て勇者たりし者達/少年よ/彼の旗の下 17
 に/黄昏れる田舎/街にて/行進のうた 20
 来るべき時/あらし/一つの生命 (*詩) 西村三郎 18
 近事一束 はじめ 21
 (埋め草) 22

無産階級文化研究所設立について 瓜田新 23
 お前らのやりかた 25
 覚悟を要す 31
 編輯後記 山本 32
 (奥付) 32
 (広告) 希望閣「ロシアに入る」他 [表3]
 (広告) 『解放新聞』 [表4]

戦闘文芸社版『戦闘文芸』について

大正十三(一九二四)年六月一日創刊。大正十五年四月号まで全九冊(大正十三年七月、八月休刊)。同人制左翼文芸誌。菊判(縦にミリ×横トミリ)。編輯発行兼印刷人は山本伊津雄(東京市牛込区市ヶ谷山伏町一ノ九)。発行所、戦闘文芸社(山本と同じ)。印刷所は貫誠社(東京市牛込区早稲田鶴巻町二二六)。第一卷第四号より編輯発行兼印刷人は岩崎一(東京市外西大久保二八、伊東方)。また、戦闘文芸社の住所が印刷所(貫誠社)と同じになる。定価は二十五

銭。第一巻第五号、十五銭（但し奥付には定価二十五銭とあり表紙に「特価十五銭」とある）。第二巻第一号以降、二十銭。ページ数も当初は五十頁台であったが、第一巻第五号以降、三十頁台に減少した。大売捌所は、初め東京堂、北隆館、東海堂。第一巻第二号で北隆館が脱けて第一巻第三号から上田屋が加わる。第一巻第五号以降、上田屋が消えて北隆館が復活する。第一巻第三号は発禁（翌号表紙に「前号発売禁止」とある）。第二巻第三号以降、表紙に「無産階級文芸雑誌」と入る。

『日本近代文学大事典』第五巻の「戦闘文芸」（項目執筆者・中島国彦）によれば、「第一早稻田高等学院グループの同人誌で、海外の進歩的文学運動や表現主義の影響のもと、「階級意識の高調」「心理と戦闘への文芸」を志向した」とされる。文壇的にはほとんど無名の若者たちによる先駆的なプロレタリア文芸誌の一つで、『文芸戦線』にひと月遅れて創刊された。

第一巻第三号の「弁明一つ」（無署名）では、表紙のデザインが『文芸戦線』の「モホー」という声に反論し、表紙は『赤旗』の「ヘウセツ」だと告白している。また同記事では、「誌名に於て諸君に敬意を表して、『文芸戦線』の名を譲ったと主張されている。また、第一巻第五号には『文芸戦線』対『戦闘文芸』の野球対戦の成績があり、「平均年齢文戦三十一、戦闘二十一、試合結果は一〇対一四」とあるように、先輩格の文戦同人に対する公私にわたる対抗意識がうかがえる。

『文芸戦線』は大正十四年二月から五月まで休刊したが、この頃から、岩崎一（英耿）は『戦闘文芸』誌上において、プロレタリア文学者の統一組織の結成を主張した。この主張は同志の休刊後、復刊した『文芸戦線』誌上においてつづけられた。

（関連文献）

英耿「無産派文芸運動の危機とその新方向」（『戦闘文芸』大正十四年二月）

英耿「治安維持法案と社会運動上に於ける戦線の統一の必要」（『戦闘文芸』大正十四年三月）

岩崎一「日本無産階級文芸作家聯盟短見」（『戦闘文芸』大正十四年四月）

岩崎一「分り切った事そして実行出来ぬ事（無産作家聯盟のABC）」（『文芸戦線』大正十四年六月）

岩崎一「文芸の戦野に於ける青年運動 全国青年文芸聯合」（『文芸戦線』大正十四年七月）

岩崎一「本来の立場に帰れ——先輩諸兄に呈するの文——」（『文芸戦線』大正十四年八月）

『戦闘文芸』四月号には、「無産階級文化研究所設立について」という一文（無署名）が掲載されており、『文芸戦線』七月号の岩崎の文章「文芸の戦野に於ける青年運動 全国青年文芸聯合」の末尾には、「プロレタリア文化研究所にて」と記されている。さらに『文芸戦線』大正十四年十二月号の岩崎一「美学其他に関する書簡」にも、「僕達研究所の同人」という文言がある。「研究所」としての実態は不明であるが、彼の意識が「文化」運動にあつたことを示している点では興味深い。

この間、『文芸戦線』同人の側からの反応は鈍かったが、七月初旬、岩崎一が自宅に山田清三郎・林房雄らを招き、ようやく話が具体化していくこととなる（山田清三郎「聯盟に就て」『文芸戦線』大正十

四年九月号）。ただし、すでに大正十四年一月号の『文芸戦線』には、コミンテルンによる「国内的組合」結成の呼びかけが掲載されており、『文芸戦線』同人たちの側にも、統一組織の必要性は十分に認識されていた。

その後、『文芸戦線』八月号に山田清三郎の「文芸家と社会生活（無産派文芸家聯盟の要）」が掲載され、聯盟の必要が説かれた。この記事の中でも、「今また岩崎一君などが盛に我々に慫慂してゐる無産派文芸家聯盟には、僕も全然賛成である」とある通り、十月四日に發起人会が開催され、十二月六日に創立された「日本プロレタリア文芸聯盟」の真の立役者は岩崎だった。岩崎は文芸聯盟の世話人、「規定草案」起草委員などに選任されており、聯盟の中心に位置を占めていたことがうかがえる。

同年の『文芸戦線』九月号には、休刊前の『戦闘文芸』のコラム欄「散弾 当るも……当らぬも……」が掲載されている（無署名だが岩崎だろう）。ここには、文芸聯盟による運動について、「映画も作れ百姓芝居もやれ。小牧さん、スポーツもやりませうよ。くげぬま下んだりから、足袋はだしで出たらつしやい」とあり、世俗的な大衆文化運動を模索しようとしていたことがうかがえる。『文芸戦線』の休刊から復刊、そして日本プロレタリア文芸聯盟の設立という大正十四年の動きの中で、『戦闘文芸』および岩崎一は、統一組織結成を促しつつ、『文芸戦線』へ合流していくという過程をたどった。だが、岩崎の文化運動はこれ以上の展開を見なかった。

大正十五年三月号の第二次『解放』の文芸聯盟批判の特集に岩崎や『戦闘文芸』旧同人の北見與志の名前が見えることから、岩崎らは急速に運動の中心から遠ざかった（遠ざけられた）ようである。その後の『戦闘文芸』同人たちの動向は定かではない。

第一卷第三号 昭和三年八月一日発行

八月号

〔表紙〕

〔広告〕 野口米次郎『日本美術読本』（平凡社）、石井柏亭『西洋美術読本』（平凡社）

凡社

編輯前記

〔目次〕

無産大衆と文学

プロレタリア文学に対する過程的批評の基準

無産階級大衆文芸とは何ぞや？ — 或は無産階級純文芸とは何ぞや —

本聯盟状勢報告 *1

規約抜粹

尖鋭 *2

戦旗への注文等

プロレタリア自身の文学

新聞記者の魂

誰か鳥の雌雄を知らんや

隨筆・感想

二人将校

一つの警告

プチブル感情を棄てろ

政治小説私見

島影盟

26
27、
64

北村洋吉

25
26

渡邊寛

23
25

越中谷利一

20
23

光成信男

19

大河原浩

19

秋哲夫

18
19

越中谷利一

18
19

光成信男

17
16

原田仙二郎

14
16

江口渙

4
8

大河原浩

9
13

〔表1〕

〔表2〕

〔表3〕

〔表4〕

瘦せた獣 (*詩)

見ろ生命の真理を! (*詩)

旋風

争議の跡

ペンを磨け (*詩)

廻れ右だ (*詩)

夏の生活から (*詩)

炎天の下で

四畳間と鉄板の上

行軍の日

街頭の俳優

炎天の仕事場

闘ひの扉を叩く (*小説)

硝子鉢の中の憂鬱 (*小説)

夜の歌 (*小説)

古い疵 (二) (*小説)

(広告) ゼラチノグラフ

(広告) 石丸梧平『人生創造 思想体系』(人生創造社)

福田正夫 28
大道寺浩一 30
細野孝二郎 31

山本勇夫 32

柴田明夫 33

脇田務 33

坂本久生 33

加藤由藏 34
渡邊伍郎 35
倉光賢治 36
久保田宏 38
佐藤英昌 41
村田千秋 49
津本武雄 52
佐々木弘之 60
64

〔表3〕

〔表4〕

〔表1〕

〔表2〕

〔表3〕

〔表4〕

〔表1〕

〔表2〕

〔表3〕

〔表4〕

〔表1〕

〔表2〕

〔表3〕

〔表4〕

〔表1〕

〔表2〕

〔表3〕

〔表4〕

〔表1〕

〔表2〕

〔表3〕

〔表4〕

*2 各記事のタイトルは目次より補った。

日本無産派文芸聯盟本部版『尖鋭』について

昭和三(一九二八)年六月一日創刊。同年八月号まで全三冊。日本無産派文芸聯盟機関誌。菊判(縦230ミリ×横150ミリ)。欧文題号「OCT-POINT」。ロシア語で「ospota」は「切れ味」「鋭さ」の意。二号まで表紙に掲載。編輯兼発行人、光成信男(創刊号は「信夫」と表記。住所なし)。発行所、日本無産派文芸聯盟本部(東京市外高田町雑司ヶ谷三〇)。印刷所、株式会社正明会(東京市外池袋九二四)。印刷人、片岡懋。定価は十五銭。表紙、第二号・腰山七之助、第三号・本聯盟美術部。創刊号表紙に「無産階級文芸雑誌」、第二号表紙に「反……作品行動へ」、第三号表紙に「無産階級大衆文芸論号」とある。

大正十五年十一月十四日、プロレタリア文芸聯盟は第二回大会を開き、日本プロレタリア芸術聯盟(プロ芸)に改組した。改組にあたり、非マルクス主義者が排除された。この内、無政府主義者とそれに近いグループは、翌年、昭和二年一月に『文芸解放』を創刊した。また農民文学者たちは、農民文芸会を結成し、やや遅れて昭和二年十月に第一次『農民』を創刊した。この間の、昭和二年六月九日には、プロ芸を除名された十六名が、『文芸戦線』を持って脱退し、労農芸術家聯盟を結成している。

こうした過程の中で、プロ芸の動向と相容れない者たちを広く集めて結成されたのが「日本無産派文芸聯盟」である。結成(発起人会)は昭和二年四月二十二日で、中心人物は小川未明・江口渙・村

松正俊らであった。結成後、同聯盟は第二次『解放』を機関誌とした。第二次『解放』は、大正十四年十月(第四卷第一号)に同人制でスタートしたが、実質的な経営者は山崎今朝弥であった。同誌についての詳細は『現代日本文芸総覧』補巻(明治文献、一九七三年)の解題を参照されたい。

日本無産派文芸聯盟は、昭和二年六月号から昭和三年一月号まで『解放』を機関誌とした。しかし、山崎が日本労農党の支持団体になることを雑誌提供の条件としたため、聯盟は『解放』と袂を分かつこととなり、その結果『尖鋭』が創刊されたのである。

創刊号の「本聯盟状況報告」に、「本聯盟が『解放』と袂別してより直ちに機関誌を発刊する筈のところ『解放』当時の聯盟員の中に種々な暗中策動者が生じたため、進捗せず休態の有様であったが、其後熱烈なる有志等によつて準備会を組織し数次会合の上機関誌発刊の速進を謀る。/三月十三日本郷燕軒に於いて開かれた日本左翼文芸家総聯合に本聯盟も参加し、当日の大会に江口渙君外二十五名出席。/四月五日本部を便宜上解放社から現所に移し、第一回仮準備会を開き、仮編輯委員に江口渙、大木雄三、光成信男、越中谷利一、大河原浩の諸君を挙げ」などである。

以後、昭和三年四月二十二日に春季総会が開かれ、前記仮編輯委員五名に島影盟を加えた六名が新執行委員に選ばれた。右の報告にも記されているように、昭和三年三月十三日に「左翼文芸家総聯合」が結成されたが、その後、三・一五事件をへて、三月二十五日にプロ芸と前衛芸術家同盟が合同して、全日本無産者芸術聯盟(ナツプ)が設立された。四月二十八日には「左翼文芸家総聯合」に参加していた闘争芸術科聯盟と左翼芸術同盟が解体し、ナツプに合流する。すでに成立していた労農芸術家聯盟と対峙する形で、急速にナツプ

へと勢力が集中されていく中で、統一戦線「左翼文芸家総聯合」は空中分解したのである。

日本無産派文芸聯盟では、四月以降「内藤辰雄・中西伊之助・外三名が脱退」（第三号の「本聯盟状勢報告」）し、江口渙・光成信男・越中谷利一らが中心メンバーとして残った。日本無産派文芸聯盟は、ナツプ対文戦の対立構図に従って引き裂かれ、ナツプを支持する残留者たちが『尖鋭』を刊行したということになる。誌面には『文芸戦線』への厳しい批判が多く、『戦旗』寄りの立場が鮮明にされている。八月号には特に終刊の断りはなく、これが最終号かは判断としない。しかし、右の三名はいずれもナツプに参加しており、最初に『戦旗』に執筆した越中谷利一の「戒厳令と兵卒」は昭和三年九月号（第一巻第五号）に掲載されていることから、八月号で最後になったものと思われる。創刊号がすでにナツプ結成以後であることから、思想的には雑多な要素を含みつつも、江口らにとってはマルクス主義への転向の最終過程をたどりつつあることをナツプ側に見られる舞台となった。

国立国会図書館（東京本館）所蔵本を参観した。

（村田裕和）

『時代文化』

時代文化社発行

昭和四年六月〜昭和五年五月（全九冊）

第一卷第一号 昭和四年六月一日発行

六月創刊号

〔表紙〕				
〔広告〕 片山正雄著『雙解独和大辞典』『雙解独和小辞典』			〔表1〕	
〔広告〕 白十字堂本店			〔表2〕	
〔目次〕			3	
〔廣告〕 白木屋・井上洋服店			4	5
〔扉〕			6	
ブルジョア社会学の方法論 — 今中氏の所論			7	
を駁す —				
加賀野美市			6	9
帝国主義その他について — コミンテルンの				
綱領草案の第一篇の若干の問題について — *				
ブハーリン、赤羽勝訳			10	14
芸術の社会的価値とその芸術的法則の問題其				
他 — 文芸時評 —				
高見順			15	23
トーカーと生ける人形 — 映画時評 —				
喜多毅			24	25
心座その他 — 演劇時評 —				
十時三郎			26	29、32
貧乏人の埋葬（*小説）				
カール・センヘル作、丘上香訳			30	32
ビスカトールとベルリン民衆劇場（一）				
島上千一			33	39、56

建築 レーニン記念図書館並びに食堂

村口的一本松より（*詩）

動物園で —（*随想）

資本主義と機械（*随想）

ロシア映画のイデオロギーと実際

トーンフィルム論

オレック・ウオイノフ、大塩岐久雄訳

堤を行く救済婦人会（「欽毒事件」の一節）（*小説）

高見順

出産（*小説）

島上千一

正道を行く（其一）（*小説）

柴田賢一

伯林と戦線 四幕（*戯曲）

町田純一

編輯後記 *2

編輯部

〔奥付〕

中島ベーカーリ

〔広告〕 マリー・ストープス著、馬島備訳『避妊の研究』（平野書房）

〔表3〕

〔広告〕 岩波文庫最新刊

〔表4〕

*1 冒頭に「綱領委員会に於ける同志ブハーリンの演説のうちより」とある。

*2 「無産階級運動は反動の荒波の中に、困難な、しかし、力強い闘争を続けてゐる。われ／＼はこの意義ある時にあたつて、文化戦線上の諸問題を問題とし、われ／＼の出来うるかぎりの技術を提供して、与へられた任務を果たすことを盟ふ」とある。

檻の低級闘士 ― 同志Nにおくる― (*小説)	高見順	6	19
白色●●● (*詩) *1	玉独清、白坂篤人	20	21
焦熱地獄の解放運動の犠牲者と犠牲者に対する労働者農民の支持!	救援会	20	
― 獄中の友へ *2	救援会	21	
炭坑の土佐犬 (*小説)	町田純一	22	38
亀戸事件日記	南葛労働会	38	
途に斃る (*小説)	増田操	39	53
戦雲【十四場】 (*戯曲)	水町三郎	54	68
九月の暦 (一)		68	
ソヴィエートウクライナの文学			
映画『セントペテルスブルグ』の最後に就て	ニコラ・チエレンシチエンコ、島上千一	69	71
ロシア詩の展開に関する書覚 *4	ヴェ・ブドフキン、大塩岐久雄	71	73
大衆の顔 (*随想)	ドイツチュルヤルモリンスキー、杉村保釈	73	81
獄中だより (一通目、「谷×様	貴司山治	82	87
目「谷×兄 岩×義×」、四通目「市ヶ谷刑務所 中×義×」、五			
通目「市ヶ谷刑務所 渡×健×」、六通目「市ヶ谷刑務所 杉×文			
×」、七通目「市ヶ谷刑務所 金×鎮×」、八通目「東京衛戍刑務所			
山×集×「浅××子様」、九通目「市ヶ谷刑務所 ×浦×五郎」、			
十通目「市ヶ谷刑務所 橋×省×」、十一通目「市ヶ谷刑務所 金			
××」、十二通目「市ヶ谷刑務所 ×本×男」、十三通目「牛込刑			
務所 ×坂×」、十四通目「市ヶ谷刑務所立×清」、十五通目「谷			
×兄 清×平×郎)」		82	99

震災手記より			
新才人のヴァリエーション *5			
石を抛つ			
演劇の記録的雑感			
赤い英雄たち (*小説)	香川朝	97	99
九月の暦 (二)	デIMITリイ・フオウルマノフ、	106	100
独逸の劇団 ビスカートルその他 *6	十時三郎	106	106
編輯後記	M生	107	108
〔奥付〕	編輯局	109	109
(広告) 独逸バー フレダルマウス		110	110
(広告) エス・テイ洋服店、井上洋服店		111	111
(広告) 中島ベーカーリ		111	113
(広告) マリー・ストープス著、馬島備訳『避妊の研究』(平野書房)		111	113
(広告) プロレタリア文芸雑誌『腕』創刊号		111	114
(広告) 文芸誌『1929』九月号		111	114
(広告) 『映画往来』九月号		116	114
(広告) ライオン歯磨		116	114
(広告) 『第三十二回夏期講習会』(独逸語専 修学校)、『独逸語学雑誌』(日		117	118
独書院)			
(広告) 佐久間政一『和文独訳新研究』(郁文堂書店)			[表3]
(広告) 『ゴリキイ全集』(改造社)			[表4]
*1 目次には「白色テロル」とある。			
*2 「これは救援会が獄中の同志へ送った手紙の中の一つだ。そ			
して同志はこの書信にどう答へたか。」			

- * 3 本文には「セント・ペテルスブルグの最後」とある。
- * 4 末尾に「ロシア詩集、一九二七年」より」とある。
- * 5 「ヴ」は「ワ」に濁点。
- * 6 「ベルリンにて」とある。

第一卷第四号 昭和四年十月一日発行

十月号

〔表紙〕					
(広告)『国際文化』十月号(白揚社)					
(広告)『独和对訳 ハルツ紀行』ほか(南山堂書店)					
〔目次〕					
(広告)中島ベーカー、甘酒屋喫茶店					
〔扉〕 * 1					
暴風 (*小説)	柴田賢一	6	30		
ハンガリー×命(十月の歴史から)					
前進	南野定正	31	47		
モーターの歌 (*詩)	ウイリアム・アレン・ワアド	31	47		
雨 (*詩)	ノルマン・マクロオド	47			
愛国者の前提 (*詩)	ノルマン・マクロオド	47			
十月の心臓(十月/伝単/再び十月)	白坂篤人	48	49		
霹靂 (*小説)	高見順	50	72		
芸術変化の内的法則と社会的条件	谷川徹				
三氏の所論を契機として	安田義一	73	82		
我がプロレタリア文学は今如何なる段階に立					

〔表1〕

〔表2〕

つか * 2

独逸のプロレタリア演劇(3) ビスカトー

ル、民衆劇場及びカ・マルティン

赤い英雄たち (*小説) * 3

デイ・フルマーノウ、十時三郎訳

ロシア教育制度の概観 英国教員労働同盟、杉村保訳

編輯後記

〔奥付〕

(広告)『山本宣治全集』(ロゴス書院)

* 1 「ニュー・マッセズ所載」。

* 2 「九月号『三田文学』でも述べておいた」。

* 3 「前号キューバとあるはクバンの誤り」。

鈴木厚

島上千一

106

93

116

105

〔表3〕

〔表3〕

〔表4〕

第一卷第五号 昭和四年十一月一日発行

十一月号

〔表紙〕					
(広告)『勤労教育』(隆文館)					
(広告) 独逸パー フレダルマウス					
〔目次〕					
(広告)『新興映画』十一月号(新興映画社・共生園)					
〔扉〕 * 1					
プロレタリア文学は集团的生産方法によらね	貴司山治	6	9		
ばならない					

83

84

85

92

93

105

〔表3〕

〔表3〕

〔表4〕

醸造工(その一)	丸山義二	10
夜から夜まで	柴田賢一	28
共同作業組 (*詩) *2	デム・マアフィ	36
霹靂 その二 (*小説)	高見順	37
巡洋艦ガングト号 三幕十二景	町田純一	43
赤旗へ(一) 独逸革命家の自伝	マクス・ヘルツ、島上千一訳	58
或る男 (*詩)	ゲエル・ウイルヘルム	65
ベズイミヨンスキーの芸術を紹介す	ペ・エス・コーカン、尾瀬敬止訳	66
「西部戦線異状なし」を読まない人々のため	十時三郎	67
ソヴェート教育の実際 上 *3	英国教員労働同盟、杉村保訳	72
ジャン・ネット・マールの『十三日間』に	白坂篤人	75
ついて	高見順	78
点菜の数句	高見順	80
詩集「ペリカン」 *4	高見順	82
ソヴェート農村青年に与へたる十月革命の影響	国際×青年同盟執行委員会版、水町三郎抄訳	82
〔中露における図書館の数〕		85
赤い英雄たち 【長編第三回】	デイ・フルマーノフ	86
〔ソヴェートにおける新聞取扱割合〕	安田義一	95
プロレタリア芸術の大衆化の問題	編輯局	96
編輯後記		102
〔奥付〕		〔表3〕

(広告) 『山本宣治全集』(ロゴス書院)			
*1 「レーニン×青年同盟」および「日本青年訓練所」の会員数などの統計表。			
*2 訳者不明。			
*3 原本は十月号参照。			
*4 ノンブル「81」「82」逆転。			
〔表紙〕			
(広告) 『ロダン辞典』(弘津堂書房)			
(広告) 『教育的社会学の基礎』(上田泰文堂)			
〔目次〕			
(広告) 井上洋服店、中島ベーカリー			
ブル文学の攻勢とプロ文学の新展開	大宅壮一	6	〔表1〕
チャールナリズムの二傾向	早坂二郎	5	
文芸評論も亦大衆化しなければならぬ	安田義一	4	〔表2〕
平林初之輔論	貴司山治	2	
三〇年度の展望 覚え書的に	高見順	1	
新版大東京案内 (*紹介)	柴田賢一	8	
1928年に於ける映画インテリゲンチヤの使命	武田忠哉	11	
ベズイミヨンスキー三章(妄想/其処に/歌)		6	
		5	
		4	
		2	
		1	
		3	
		11	
		17	
		23	
		29	
		29	
		33	

『小都會』の後言 (*詩)

ソヴェートの電化事業

C・H・ダグラスの「信用機関の社会化」

ベツイミونسキー詩集——尾瀨氏訳を読む

立体と平面

S村の話

養蚕を見よ

赤旗へ(二) —— 独逸革命家の自伝——

マクス・ヘルツ、島上千一訳

ソヴェート教育の実際 (下)

英国教員労働同盟、杉村保訳

荒れる海を (*詩)

第一ラミー争議 短歌 *1

ブロンクス公演のきのこ (イースト・サイド
回想記から) (*小説) *2

紹介を機縁として *3
マイケル・ゴールド、高見順訳

リガとシカゴ (*小説)

ジョン・リード、向山久哉訳

何を約束してくれるか —— 或る少年脱走者の
話—— (*小説)

渡邊好文 82 〳 93

編輯後記

〔奥付〕

(広告) 『サヴェート詩人選集 第一卷 ヴェツイミونسキー詩集』(素人
社) 〔表3〕

〔表4〕

*1 短歌とあるが短詩とするほうが正確。

*2 「きのこ」に傍点。

*3 「マイケル・ゴールドはアメリカの「戦旗」ともいふべき」ニ

ユー・マツセズ」の編輯者です」とある。近代文学館所蔵

本は71〜74頁切除。

第二年第二号 昭和五年三月一日発行

三月号 創作特輯

〔表紙〕

(広告) 喫茶・酒場ミモサ

(広告) 『短歌前衛』三月号

〔目次〕

(広告) 中島ベーカーリー、井上洋服店

〔扉〕

闘士 (*小説)

図書館 (*小説) *1

愛国製菓会社 (*小説)

どろぼう (*小説)

平原の陰影 (*小説)

ピッチ労働者の叫び (*小説)

画工リユウチコフ (*小説)

ある借地人群 (*小説)

ゴー・ストツプ (*随想)

こんな代議士 (*小説)

金時計物語 (*小説)

或日の遺族 (*小説)

〔表1〕

〔表2〕

貴司山治	6	5	4	2	1
高見順	19	18	3		
丸山義二	32	43			
水町三郎	44	52			
町田純一	53	66			
田口運蔵	67	69			
松永延造	69	73			
野村愛正	74	78			
丸山義二	78	86			
十時三郎	79	86			
白坂篤人	87	98			
柴田賢一	99	105			

貞操と草鞋（*小説） 渡邊好文 106

夜業の後／輻重輪卒／船のペンキ工（*短歌十一首） 逗子八郎 118

文学的戦術論 — 大宅壮一氏の著書 — 丸山義二 119

服部之總著「明治維新史」附 — 絶対主義論 島上 120

プロレタリア劇場 — 「政治劇場からの一節」 — 121

エルウィン・ピスカトル、島上千一抄訳 124

〔埋め草〕 *2 124

プロレタリア文学の形式的闘争 安田義一 125

編輯後記 130

〔奥付〕 〔表3〕

〔広告〕 貴司山治『ゴー・ストップ』（中央公論社） 〔表4〕

*1 日本近代文学館所蔵本は切除。九州大学所蔵本（複写取り

寄せ）により確認。

*2 「ベルンハルトデイボルト ピスカトル戯曲」とあり、四

行の短文。

第二年第三号 昭和五年四月一日発行

四月号 *発禁

〔表紙〕 〔表1〕

〔広告〕 マルクス書房四月新刊 高山洋吉訳編『解党主義の分析と批判』フ

ルマーノフ作・小宮山明敏訳『叛乱』ほか

〔広告〕 喫茶・酒場ミモサ（東中野駅前）

〔目次〕 〔表2〕 2 3

〔広告〕 石川哲『吾等の祖先は猿か』ヒレリア・ペロツク著、石川哲訳『ウ
エルズ文化史大系に関する論争』（上田泰文堂） 4

〔扉〕 座米検査（*小説） 丸山義二 5

配属将校 白坂篤人 6

デカ部屋 十時三郎 30

戦場 — ガストニア紡織大争議の一断面 — 高見順 38

図書部新設 時代文化社図書部 45

新興文学とジャーナリズムの検討座談会 大宅壮一 66

— 太宅・貴司両氏を中心として — 貴司山治 74

白須孝輔氏の詩集ストライキ宣言について 町田純一 10

無産文芸のとるべき態度 — 一般ジャーナリ 柴田賢一 10

ズムに対しての問題 — 島上千一 10

直接購読者を募る!! *1 鈴木厚 75

三月号（発禁）目次 77

金融ブルヂョアジの装甲車 — 銀行の話 — 武波倫三 78

教会と摩天閣（*詩） 水町三郎訳 80

休戦日（*新興短歌） 會田毅 81

下水拡張工事 (*新興短歌)
波止場人足の歌 (*新興短歌)
ロシアにおける成人教育
人間について — プロレタリア文学当面の
一課題 —

逗子八郎
逗子八郎
杉村保釈
86
87
88
89

〔奥付〕
〔広告〕『世界の動き』四月「四、一六事件追憶」号、群司次郎正著『ミス・ニッポン』(世界の動き社)
〔広告〕貴山山治『ゴー・ストップ』三月下旬出来(中央公論社)

木村利美
時代文化編集局
96
92
95

*1 読者カード(切り取り用)付き。

第二年第四号 昭和五年五月一日発行

May デイ記念号

〔表紙〕

〔表1〕

〔広告〕『青年コミンテルンの綱領』『第二支那革命論文集』『プロレタリア短歌集一九三〇年版』(マルクス書房)
〔表2〕

〔広告〕東京映画小劇場「生ける人形」「下郎」、雑誌『東京小劇場』(五月号)

〔目次〕

原稿を送れ!

時代文化編輯局

時代文化読者カード

〔扉〕 *1

5

4

4

2
3

1

ガストニアの歌 — ガストニア紡織大争議の

一断面 — (*小説)

ウイリアム・グロツバアに就て *2

(写真) 紡績争議

映画館 (*小説) *3

俸給労働者 (*小説) *4

メーデーに寄する言葉

幸福への道

作家もメーデーへ

〔メッセージ〕

〔メッセージ〕

〔メッセージ〕

メーデー追想記

五一節前夜 (*小説)

キール軍港 (*戯曲) *5

青い悪魔と赤い悪魔の所説 — 雅川氏並びに

平林、青野両氏の批判 —

スポーツを奪取せよ — プロレタリアヤスポー

ツの提唱 —

プロレタリア野球リーグ戦陸上競技会 時代文

化社スポーツ部

金歯 (*小品)

アメリカの労働者スポーツ同盟の声明 *6

「カイザーの苦力達」 — テオドル・プリフイ

ール —

留置場から戻った源 (*短歌) *7

高見順

丸山義二

水町三郎

松本實

白坂篤人訳

荏原生

馮和法

南條正

十時三郎

萩原生

南條正

71

70

68

67

68

66

66

66

66

66

66

66

66

66

112
113

109
111

106
111

105
108

105
104

94
104

77
93

72
76

71

70

68
69

67
68

68
70

66
67

66
67

66
67

66
67

66
67

66
67

66
67

40
65

32
39

31
76

31
39

6
31

田舎の母を思ふ（＊短歌）

坪野哲久
楠田敏郎

115 114

氾濫の中から（＊短歌）

世界プロレタリア文学の先輩達 アメリカ編

白坂篤人

116
120

（一） ジャック・ロンドンの明るさ

小宮山明敏氏訳 フルマノーフの「反乱」

安田義一

121
127

平林初之輔氏の固定的レアリズムについて

安田義一

128

〔奥付〕

時代文化編集局

〔広告〕『吾等の祖先は猿か』『ウエルズ文化史大系に関する論争』（上田泰文）

〔表3〕

〔広告〕『現代暴露文学選集』（天人社）

〔表4〕

* 1 「ROTTER MAI」とある。

* 2 前号の高見の小説「戦場」及び「ガストニアの歌」の挿絵

画家について。

* 3 「つづく」とある。

* 4 「未完」とある。

* 5 「つづく」とある。

* 6 「ニュー・マッセズ三月号所載」。

* 7 目次に従い「短歌」としたが自由律であり「詩」に近い。

次の二つの記事も同じ。

時代文化社版『時代文化』について

昭和四（一九二九）年六月一日創刊。昭和五年五月まで全九冊（昭

和四年八月、十二月、昭和五年一月休刊）。菊判（縦210mm×横150mm）。左翼文芸誌。編輯兼発行人は安江次朗（東京早稲田下戸塚二四五）、第二号第一号は小出華生（東京市小石川区音羽七丁目）、第二号第二号・第三号は田丸宋一（東京府戸塚町下戸塚一四）、第四号は水町三郎（東京府戸塚町下戸塚一四）（不変）。発行所、時代文化社（住所はすべて発行人住所と同じ）。印刷所、旭光社印刷所（東京早稲田下戸塚二四五）。第二号第一号に印刷者安江次朗の名が併記される。第二号第二号より泰文堂印刷所（東京府戸塚町下戸塚一四）、印刷者安元義太。発売所として第二号第二号より上田泰文堂（東京府戸塚町下戸塚一四）。

表紙は、創刊号から順に新道繁、沖島洋、牧島泰輔、（記載なし）、相生志頭夫、辻島夫、中村進治郎（以下同じ）。カットは、第一号第二号より最後まで相生志頭夫。ただし、創刊号および第一号第四号は記載なく、第二号第一号のみ辻島夫。定価は三十銭。第一号第三号より二十銭。最終の第二号第四号で三十銭に復す。第二号第三号は発禁。

第二号第四号の水町三郎以外の編輯兼発行人は、本誌に記事掲載がない。編輯兼発行人住所が第二号第一号をのぞいてすべて印刷所住所と一致し、第二号第一号の印刷者・安江次朗が、創刊号から第一号第五号までの編輯兼発行人であることから、意図的に印刷所の関係者もしくは変名を編輯兼発行人としたことなどが考えられる。最終号の水町三郎は、水守三郎であろうか。水守三郎は高見順『昭和文学盛衰史』（『高見順全集』第十三巻、勁草書房、一九七二年）によれば、早稲田の学生を中心とするアナキスト系の文芸同人誌『世紀文学』から出発し、のちにレヴュー作者となった人物である。毎号執筆の高見順は、昭和二年四月、東京帝大文学部英文学科に

入学。九月、同人誌『文芸交錯』を創刊した。また、昭和三年二月五日に壺井繁治・三好十郎らが結成した左翼芸術同盟に参加し、本格的にプロレタリア文学運動に関わった。この同盟は「アナキストの転換者の集まりといふ印象」（『昭和文学盛衰史』）であったという。同年四月二十八日、同盟は解散してナツプに合流し、高見もマルクス主義へと転換する。在学していた東大では、『文芸交錯』を含む七つの同人誌が一斉に廃刊し、同年七月、『大学左派』（昭和三年七月～四年二月）が創刊された。高見は、池田寿夫・木村利美らとともにこれに加わった。同誌は翌昭和四年六月に後継誌『十月』（昭和四年六月～十二月）となり、ナツプの公式主義を批判する立場をとる。『時代文化』はこの『十月』と同年同月に創刊された。力を分散してしまうにもかかわらず、『十月』と同時に創刊された理由ははっきりとしない。『時代文化』のあと、高見らは『集団』（昭和五年七月～七年六月）を創刊する。

高見順の他、執筆陣は、町田純一（渋川驍）・柴田賢一・木村利美・逗子八郎など東京帝大の学生・卒業生らが中心で、そこに貴司山治・大宅壮一・森山啓・丸山義二らが協力するようになかたちとなっている。第二年第二号の創作特輯には田口運蔵・松永延造・野村愛正も寄稿しており、文戦派、非マルクス主義者にも門戸を開いている。こうした寄稿家たちの顔ぶれからも、『時代文化』がナツプの硬直したイデオロギーとは異なる立場で、プロレタリア文学を模索していたことがうかがえる。

何度も登場する貴司山治は、当時『ゴー・ストッブ』で人気を博していた。だが、貴司はそれがあだとなつて作家同盟中央委員会にたびたび呼び出されて意見聴取される。さらに、中央委員会から指示され、昭和五年四月六日の作家同盟第二回大会で「芸術大衆化」

に関する提案書を提出した。詳細は本誌前号付録（注1）にゆずるが、要するに貴司の主張は、議論をごまんとするよりも、大衆をとりこにする面白い作品を書けということにつきる。これに対して、中央委員会は実質的に芸術大衆化を否定しつつ、「芸術運動のポリシエヴィキー化」へと舵を切る。当時、蔵原惟人自身が、「蔵原派」もなければ「貴司派」もなければ、ナツプ分裂の兆候などは尚更あり得ようはずはない（注2）と火消しに回らねばならなかったほど、影響は深刻だった。おそらくそれは貴司の大衆的人気ばかりではなく、高見順ら、若手同盟員への影響が看過できなかったことも一因だったのではなからうか。『時代文化』は、右の第二回大会が開催され、佐藤耕一＝蔵原惟人の「ナツプ」芸術家の新しい任務——共産主義芸術の確立へ（『戦旗』昭和五年四月）が発表された翌月の五月号が現在確認しうる最終号となっている。

日本近代文学館所蔵（高見順旧蔵）本および日本大学総合芸術情報センター所蔵本を参観した。なお、日本近代文学館所蔵本の内、第二年第一号および第二号の一部に切除箇所がある。前者は日本大学総合芸術情報センター所蔵本、後者は九州大学中央図書館所蔵本（当該箇所のみ複写）により補った。

（村田裕和）

注1 伊藤純「日本プロレタリア作家同盟第二回大会 貴司山治自

筆提案書」（『フェンスレス』第四号、オンライン版特別付

録、二〇一六年九月）参照。http://senryokaitakuki.com/fenceless-004/fenceless004_15.pdf

注2 蔵原惟人「芸術大衆化の問題」（『中央公論』一九三〇年六月）。

